愛知県障害者団体連合会

No.83

2024. 12. 1

機関紙「愛知腎臓財団」第83号（令和６年12月号）

1　巻頭言
腎臓移植医療システムの改変に備える …… 3
公益財団法人愛知腎臓財団　副会長
ＪＣＨＯ中京病院　名誉院長　**絹川　常郎**

2　「厚生労働大臣感謝状」を受賞して …… 4
ＪＣＨＯ中京病院　泌尿器科部長　**小松　智徳**

3　「厚生労働大臣感謝状」を受賞して …… 5
あいち小児保健医療総合センター
脳神経外科部長／保健センター長　**加藤美穂子**

4　ＣＫＤシール完成！ …… 6
一般社団法人愛知県薬剤師会　理事　**坂元　里枝**

5　移植施設紹介　シリーズ第14回 …… 8
愛知医科大学病院　腎移植外科　教授　**小林　孝彰**

6　透析施設紹介
名古屋鉄道健康保険組合　名鉄病院　透析センター部長　**森弘　卓延** …… 9
医療法人はなのきクリニック　院長　**馬場　芳** …… 11

7　トピックス …… 14

8　編集後記 …… 16

発　行　所　公益財団法人　愛 知 腎 臓 財 団
発行責任者　専務理事　渡　井　至　彦
所　在　地　名古屋市中村区竹橋町36番31号 3階
TEL ０５２－４４６－８０８５
FAX ０５２－４４６－８３６８

ＵＲＬ：https://www.ai-jinzou.or.jp
e-mail：（事務）jimu@ai-jinzou.or.jp
（コーディネーター）co@ai-jinzou.or.jp

巻頭言

臓器移植医療システムの改変に備える

公益財団法人愛知腎臓財団　副会長
ＪＣＨＯ中京病院　名誉院長　絹川　常郎

これまで、本機関紙で何度もお伝えしてきましたが、国際的に遅れた日本の臓器移植を何とかしなければならないことは、読者の皆様もご承知のことと思います。

「臓器の移植に関する法律」が成立した１９９７年当時は、移植医療は特定の患者のためには必要な医療だが、死後の臓器提供はヒトの体を傷つける行為でもあるとの考えが払拭できない時代でした。同法律の施行とともに発足した日本臓器移植ネットワーク（ＪＯＴ）は、臓器移植が全国で円滑・公平に行えるよう、これまで地方で芽吹きつつあった臓器提供のための組織活動を抑え、すべての権限を１か所に集中して、トップダウンで種々のシステムを構築しました。その中には、法律の制定に向けた考え方を反映したのか、今から見れば必要以上に複雑で手間のかかる運用ルールも織り込まれました。

今は、国民の理解が少しずつ進み、コロナ禍が明けた昨年から、脳死下臓器提供数が年間１００例を越えるようになりました。これ以上増やすためには、臓器提供の可能性がある医療施設の関係者の意識改革が強く求められています。しかし、提供数を更に増加する上で最も重要な問題は、臓器移植の中心となるＪＯＴのシステム運用に綻びが見えて来た事です。

ここ１年、頻回に開催されるようになった厚生科学審議会疾病対策部会臓器移植委員会は、この綻びを修復し、システム改革を進めようとしています。その中で、これまで全国に１つと決められていた臓器のあっせん機関を複数設置するなど、そのあり方を再考すべきとの意見が強くなっています。地方で臓器提供に取り組む者にとっては、新たな組織の立ち上げに伴い、複雑化しすぎ、時には臓器提供の支障ともなっている現在のいろいろな取り決めを刷新する良いチャンスが巡って来たと受け取ることも出来ます。

愛知県は、昨年、全国一位の臓器提供を行いました。愛知腎臓財団の定款で定める10事業の内、「腎臓その他の臓器の移植推進のための協力援助」が、今述べた新しい動きと密接に関係することとなります。もし、愛知県を中心とした多臓器移植のあっせん機関の設立に協力するとなれば、いくつもクリアしなければならない課題が生じますが、移植医療による健康の回復を待望する患者さんを第一に考えれば、この改革を進めなければなりません。

関連する事ですが、もう一つ、お伝えすることがあります。愛知腎臓財団は、昨年度まで６年間、都道府県臓器移植推進組織協議会の会長県を務めてきました。これは、全国の臓器移植推進組織（バンク、財団）を束ねる唯一の協議会です。ここ数年、全国で各組織が抱える問題に関するアンケートを集計し、今年２月には、日本臨床腎移植学会でミニシンポジウムも開催、その内容は論文化されました。略称については関係学会等に広く知ってもらうため「ＲＯＰＯ（Regional Organ transplant Promote Organization）」と決めました。１つの県が、その役割を長い期間担い続けるとマンネリ化することも懸念されますので、本年度より、会長職は、熊本赤十字病院移植外科部長の山永成美先生に引き継ぎまし

た。ＲＯＰＯは厚生労働省移植対策室と情報交換を密接に行うとともに、今年９月には、長崎市で開催された日本移植学会でもシンポジウムを開催し、各地の組織との連携を進めています。その中で、愛知腎臓財団が他の都道府県組織が抱える問題の解決を支援する事は、これまで以上に大切になっています。特に、これから始まる新たなあっせん組織の立ち上げには、そこで活躍が期待される各県のコーディネーターの待遇改善、増員、スキルアップが必須です。他にもいろいろな活動が必要です。今度は、失敗は許されません。地方の力を見せましょう。

今、日本の移植医療は思い切った改革を求められています。愛知腎臓財団も長年の習慣から飛び出して活動することになると思います。皆様のご協力をお願いする次第です。

「厚生労働大臣感謝状」を受賞して

ＪＣＨＯ　中京病院　泌尿器科部長　小松　智徳

この度、厚生労働大臣感謝状を賜りましたことは、私にとって大変光栄に存じます。ご推薦いただきました愛知腎臓財団およびお力添えいただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

私の腎移植との関りは医師３年目、泌尿器科１年目の２００２年に遡ります。当時勤務していた岡崎市民病院にて、献腎移植の摘出に同行し、提供病院にて数日間待機をしていたのですが、いつドナー様が亡くなってもすぐに対応すべく緊張感をもって参加していたことを昨日のことのように覚えております。その後、名古屋大学医学部附属病院（名大病院）へ異動してからは泌尿器科における日常業務に追われていましたが、２００８年当時泌尿器科准教授でいらした服部良平先生より腎移植の勉強のため国内留学の話をいただき、田辺一成元教授率いる日本でも有数の腎移植施設である東京女子医科大学病院（女子医大）に腎移植フェローとして半年間研修の機会をいただきました。半年間という短い時間ではありましたが、数多くの腎移植症例を経験したことは、研修を終え名大病院へ戻った後、腎移植を軸に医師として世に貢献させていただく私の大きな財産となりました。女子医大で学んだ経験は大変有意義であったことはもちろんですが、全国より集う移植医の皆さんと知り合えたことも何より貴重な経験となりました。その後２０１０年より現在のＪＣＨＯ中京病院である社会保険中京病院に赴任しました。中京病院では当時副院長の絹川常郎先生、部長の辻克和先生のご指導の下、腎移植の責任的立場を任されました。名大病院時代は院内での移植医療を行うのみでしたが、中京病院異動後は院内の腎移植に限らず、幅広く様々な活動にも携わってまいりました。そのうちいくつかをご紹介いたします。２０１０年当時、まだ腎移植は一般医療としての認識は低かったと思われ、血液型が違うと移植ができないなど移植医以外は知らないことも多々ありました。まずは近隣の総合病院腎臓内科に腎移植の現状を伝え、腎代替療法として透析のみでなく腎移植の話もしてもらうようお願いに伺いました。また献腎移植の現状や維持透析時の管理が献腎移植後

の成績に大きくかかわることを透析クリニックへ伺ってお話しいたしました。新型コロナウイルス感染症が流行する以前は毎年、「世界腎臓デー」のイベントにおいて、一般の皆様にも腎移植についてより理解を深めていただけるようお話しする機会も大切にしてまいりました。もう一つは臓器提供への関りについてです。当時は臓器提供を希望する患者様がいて、実際臓器提供になった場合、脳外科や救急医の主治医がドナーの全身管理を行うことが主治医の負担になっていました。移植医として臓器提供に積極的にかかわることがタブー視されていた時代でしたが、主治医の負担軽減のため私たち泌尿器科医も微力ながらドナー管理に関わることを試みて今日に至ります。そのような姿勢が評価されたのでしょうか。現在では、日本臓器移植ネットワークからメディカルコンサルタントの依頼を受け、依頼があれば近隣の提供病院へ出向き腹部臓器の評価なども行っております。

医師になり25年、中京病院で15年、私は多くの皆様に支えられ、またご助力いただきながらここまでやってくることができました。名大病院泌尿器科同門会の皆様、女子医大泌尿器科およびフェローの会の皆様、中京病院院内コーディネーターおよびレシピエントコーディネーターの皆様、中京病院腎臓内科はじめ移植カンファレンスに参加いただく皆様、日本臓器移植ネットワークの皆様、愛知腎臓財団の皆様、そして多忙な日々の日常診療において、私が思うように行動することを温かく見守り続けてくださる中京病院泌尿器科の皆様、本当にありがとうございました。皆様と共に今回の賞を授与されたと思っております。今後も皆様のお力添えをいただきながら移植医療の発展に尽力してまいります。引き続き、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いします。

「厚生労働大臣感謝状」を受賞して

あいち小児保健医療総合センター
脳神経外科部長／保健センター長　加藤　美穂子

この度、厚生労働大臣感謝状を頂戴し、誠に光栄に存じます。ご推挙賜りました愛知腎臓財団並びにご関係の皆様に厚く御礼申し上げます。

当センターでは２０１０年の臓器移植法改正を機に、脳神経外科を開設するなど、臓器提供を視野に入れた救急体制の構築を開始しました。しかし当初は救急担当医も集中治療医も着任しておらず、センター内の体制整備は遅々として進みませんでした。２０１６年になりようやく当センターが救急および小児集中治療体制を整え、愛知県から小児救命救急センターの認定を受けた後は、重症患児のＰＩＣＵ（小児集中治療室）入室が目に見えて増加しました。それに伴い臨床的には全脳機能停止と診断される患児にも遭遇するようになり、そのような患児の家族に臓器提供のオプションが提示できないことを問題と捉え、同年末に臓器提供に関するワーキンググループを立ち上げました。

しかしながら、当初は臓器提供に対してはセンター内の抵抗感が強く、グリーンリボンキャンペーンのパンフレットを置くことさえ許可されませんでした。これは、臓器提供に対する知識や理解の不足に加え、潜在的な意識として人生の上り坂にある小児という存在

に対して人生の終わりを想像することが難しく、かつ忌避されることに起因していると推測しました。

一方、ＰＩＣＵに入室する重症例はさらに増加し、全脳機能停止と診断された患児にとって最後の権利であるといえる「臓器提供をする権利／しない権利」を提示できない状況は、「あいちの小児の砦」と自負する当センターの診療体制としては不十分ではないかとの認識を強めました。そこで、まずセンター内の理解を深めるために、臓器提供に関する研修会を繰り返し、臨床倫理の視点から小児の終末期について議論する場を設けるなど、実践と理念の両面から臓器提供／臓器移植という医療について、職員への理解を促しました。

紆余曲折を経て２０２１年、当センター初となる脳死下臓器提供が実施されました。私はこの患児の主治医でした。脳神経外科医にとって、脳死下臓器提供とは救えなかった命に対する「敗北感を抱えながら行う最後の医療」であって、「未来につながる医療」という認識を持ちにくいと感じていました。しかし、摘出のために全国から参集した移植医療を担う医師団の真摯な姿勢と心意気を目の当たりにした時、「命のバトンをつなぐ」という言葉の意味を改めて認識し、このような先生方になら、救えなかった命のバトンを託すことができると強く感じました。

また臓器提供いただいた患児のご家族から、大きな悲嘆の中、臓器提供を選択された当時の思い、そして時を経たのちの思いを拝聴する機会を得ました。この経験を小児における移植医療の中に活かせるよう、現在院内コーディネーター中心に様々な取り組みを進めております。小児患者の臓器提供について、小児専門医療施設だからこそ提案できる対応や取り組みをこれからも実践し発信してゆきたいと考えております。引き続き、ご支援賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。最後になりましたが、私たちに大きなメッセージを残してくれた患児に心から感謝を申し上げたいと思います。

ＣＫＤシール完成！

一般社団法人愛知県薬剤師会　理事　坂元　里枝

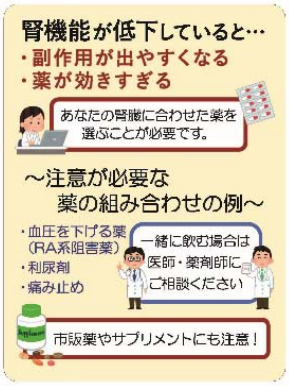
このたび、愛知腎臓財団の全面バックアップを受けて愛知県薬剤師会がＣＫＤシールを作成し、令和６年４月から運用開始となりました。

ＣＫＤシールは「ココミテ」というお薬手帳用のしおりに貼付し、患者さん用のパンフレットとともにお渡ししています。

なお、貼付対象となる検査項目・基準値を設定していますが、主な目的はＣＫＤシールを貼ることで患者さん自身が腎機能低下状態であることを意識し、腎臓を守るための行動をとる「行動変容」に繋げることです。

日本全国で様々な形態のＣＫＤシールが作られており、発行母体や運用方法も多岐に渡っていますが、都道府県薬剤師会が作成し、薬局薬剤師と患者が主体となって運用するという今回の取り組みはこれまでに例が無いものです。ＣＫＤシールの構想は10年ほど前からありましたが、このたび、愛知腎臓財団に関わる医師の先生方をはじめとする各方面のご協力を得てようやく実現いたしました。Ｃ

KDシール作成の過程で、まずデザインについては、愛知県薬剤師会の担当部会にて30パターンほどの候補を作成することからスタートし、「可愛くし過ぎない・少しの危機感を持てる感じ」かつ「受け入れやすい親しみやすさ」を意識した配色・デザインを選び、愛知腎臓財団の関係部会で確認をいただいた上で最終決定としました。



愛知腎臓財団・愛知県薬剤師会の共同作成
CKD（慢性腎臓病）シール

CKDシール　運用ルール

該当の患者に以下の3点セットをお渡しする
1. おくすり手帳用資材「ココミテ」
2. CKDシール（ココミテに貼付）
3. 患者用パンフレット

さらに、安田宜成先生（岐阜大学大学院医学系研究科　心腎呼吸先端医学講座　特任教授）をはじめとするCKD対策協議会の先生方のご指導のもとで、シールの運用ルールを策定するなどの体制を整え、令和6年4月14日(日)に開催した「CKDシール研修会」において、満を持してシールの発表を行いました。（研修会の模様は愛知県薬剤師会HP（会員用・医療関係者用サイト）にてオンデマンド配信しております。）

私どもCKDシールの作成に携わった薬剤師一同は、このシールによって一人でも多くの方々が〝腎臓の健康〟を意識した毎日を送っていただけるよう願っております。

愛知県薬剤師会は今後も薬物治療を積極的かつ適切に支援し、医薬品の適正使用を進めることで、ますます進む高齢化社会で患者さんの腎臓を守り、健康寿命を延ばす力となる活動をしてまいりたいと思っております。よろしくお願いいたします。

移植施設紹介

シリーズ　ー第十四回ー

愛知医科大学病院　腎移植外科

愛知医科大学　外科学講座（腎移植外科）　教授　小林　孝彰

今年の夏（２０２４年９月）にイスタンブールで開催された国際移植学会（ＴＴＳ２０２４）に、ウェブで参加しました。遺伝子組換えブタからヒト（脳死体、生体患者）への腎、心、肝臓の移植がアメリカ、中国で行われ、世界的に注目されていますが、臨床応用までの課題は多いようです。異種移植に対する社会的認知度を考えると、日本では移植医療そのものが広く国民に浸透しなければなりません。脳死（死体）からの臓器提供数が、欧米の数十分の一に過ぎない状況を改善する地道な努力が必要です。国もやっと重い腰を上げて、令和６年度診療報酬改定の中で、法的脳死判定後の臓器提供に係る実績として、ＤＰＣに対してポイントを付加する（大学病院で８００万円ぐらいの増収）ことを決定しております。これが５類型病院に対するインセンティブになるかわかりませんが、臓器提供実施施設が増えることを期待しております。

当院では、複数の院内コーディネーターを配置し、救命救急科をはじめとして病院全体で体制整備を行い、システムが構築されております。講演会、シミュレーション、臓器提供後の報告会（反省会）などを開催し、数は多くありませんが、亡くなられた患者さん、ご家族の希望に沿った臓器提供を実施しております。

私ども腎移植外科についてですが、生体腎移植は２０１２年７月から２０２４年10月までに２９６例、２０１６年から施設登録した献腎移植は４例実施しました。献腎移植では、まだ登録期間が短いため小児以外はなかなか選択されない状況です。２０２３年12月の時点での５年生着率は96.7％です。メンバーは、石山宏平、安次嶺聡、雫真人、河田賢（長崎大学から国内留学）、そして、レシピエント移植コーディネーターの渡邉恵、長屋さつきの合計７名で腎移植診療を行っております。

前回は、愛知医科大学の施設の特徴として、(1)充実したチーム医療、(2)高度な病院機能と地理的なメリット、(3)個々の患者さんに最適な医療（個別化医療）の提供についてお伝えしましたが、現在取り組んでいる個別化医療について記します。長期成績の向上のためには、従来からの(A)de novo DSA

（腎移植外科と腎疾患・移植免疫学寄附講座のメンバー）

（新規ドナー特異的ＨＬＡ抗体）産生抑制による慢性抗体関連型拒絶反応（chronic ABMR）の制御と(B)免疫抑制療法の適正化、最小化があります。(A)については、毎年ＨＬＡ抗体モニタリングを行い、de novo DSA検出例には積極的に腎生検を行い、移植腎機能に異常が見られない時点での拒絶反応（subclinical chronic ABMR）の診断と治療（ステロイドパルス、二重濾過血漿交換、リツキシマブなど）を行っております。症例数は少ないですが、その後ＤＳＡが陰性化し、良好な経過をたどっております。一方で、移植腎機能が悪化してからの慢性抗体関連型拒絶反応に対する治療の有効性は低く、いかに早い段階で診断し、治療するかが課題となっております。(B)については、免疫抑制剤のPharmacokinetic studyを行いＴＤＭにて適正な投与量を設定すると同時に、患者状態、背景（適合度、年齢など）を考慮し、免疫抑制薬の安全な減量（最小化）を試みております。長期の免疫抑制薬投与による副作用（とくに、シクロスポリン、タクロリムスによる腎毒性）、ウイルス感染、発癌、高血圧、脂質異常症、糖尿病などの非免疫学的なリスク因子も移植成績を妨げるリスクとなっているからです。最小化は拒絶反応を引き起こす危険性があるので、全ての患者ではなく、ＨＬＡ適合度が良好な患者を対象とします。現在では、ウェブサイトからアルゴリズムを利用し、従来のHLA-A, B, DRの適合度よりもっと詳細かつ正確に判定できるようになりました。B細胞エピトープ、T細胞エピトープ（それぞれ、B細胞受容体、T細胞受容体が認識する抗原決定基）の両方ともに適合度が良好な症例では、de novo DSA産生率が極めて低い（3.0％ vs 22.4％：適合度不良例）ことと、生体腎移植では約1／4が適合度良好群に該当することを報告しております。

末尾になりますが、２０２５年10月９日から11日にかけて、ウインクあいちにて第61回日本移植学会を開催いたします（https://www.congre.co.jp/61jst2025/）。本学会のテーマは「新たなる挑戦　超えよう！飛び出そう！弾けよう！」としました。参加者、関係者の皆様が元気になるような楽しい学会をめざして準備しております。皆様のご参加を心からお待ちしております。

（第61回日本移植学会総会のご案内）

透析施設紹介

名鉄病院

名古屋鉄道健康保険組合名鉄病院
透析センター部長　森弘　卓延

Ⅰ．病院の概要

名古屋鉄道健康保険組合が直営する名鉄病院は、名鉄電車の栄生駅ホームに直結しており、交通アクセスの便利な病院です。開設以

来、地域の皆さんの厚い信頼を受け、現在では３７３床を有する一般病院として発展してまいりました。

名鉄病院は、常に医療倫理を守り、先進の医療機器と医療設備等の充実を図り、高い医療レベルを維持すると共に、思いやりの心をもって医療サービスを提供しております。

名鉄病院は、各診療科のほか、病理診断科、予防接種センター、内視鏡センター、透析センター、中央手術部などを有し、それぞれに専門の医師を配置し、各科がしっかりと結びつき、総合力と機動力のある診療を行っています。また、時間外診療におきましても、二次輪番制救急病院として、休日・夜間共に良質な医療を提供しています。

Ⅱ．透析センター

当院の透析センターは、２０１９年７月の開設当初から９床のベッドで運用しております。

当院の２号館６階の見晴らしが良い最上階にあり、センター内から西区の街並みや、すぐ横を走る名鉄電車や新幹線を見下ろすことができる立地となっています。

現状の透析スケジュールは、月・水・金は朝・昼の２シフト制、火・木・土は朝シフトのみとして、１回６時間の長時間透析を行っています。

９床全台Online-HDF対応できるようになっており、透析患者様個々人の年齢・体格や合併症に合わせて最適な維持透析を選択し、患者様と相談して最適・最良の透析を行うように心がけています。

現在はまだ９床しかないため、通院の維持血液透析患者様は17人と制限をしています。と言うのは、他院の透析患者様で、骨折・脳血管障害・心疾患等他科での入院が必要になったり、肺炎での入院が必要になった患者様をできる限り受け入れて、この地区の維持血液透析患者様が、入院が必要になった時に頼られる透析センターとなることを目指しています。

また、先般のCOVID-19での隔離透析にも対応できるように、簡易式陰圧室も１床確保して対応しております。

透析センター設計時には、空調・照明等も熟考し、透析患者様が３～６時間の透析中快適に治療を受けられるようにしたつもりです。

また、一人一人のデータ管理も、電子カルテと透析管理システムを紐づけして、個々の患者様のデータの推移やシャントの不足率・静的静脈圧を時系列で見ながら、最適で最良の透析処方と、内シャント管理を行っております。

Ⅲ．人員配置

当院の透析センターの医師は、常勤２名・非常勤１名で最適・最良の透析処方を行えるように、また透析合併症に対応できるように、日々の診療を行っております。

看護師スタッフは、透析患者病床のある病棟看護師と、ＣＨＤＦ・ＰＭＸ等で血液浄化療法に携わるＨＣＵの病棟看護師で構成されており、勤務調整が大変な中、透析センターでの透析看護を担っています。こうした各病棟からの看護師を、これまでの６年の間に、透析看護経験の豊富な看護師に教育してもらいながら、沢山の透析経験を積んだことで、多くの透析看護師が当院内に育ってきています。

臨床工学技士は、総勢７名の技師が週替わりで透析業務にあたっており、最適・最良の透析をデータ面から監視しています。

Ⅳ．今後の課題

当初から９床のベッド数しかなく、入院加療が必要となった維持血液透析患者様を、総合病院として広く受け入れていきたいと考えておりますが、入院患者様が重なることがあり、満床の折にはお断りさせていただいている現状を、ベッド数をこの先増床することで解消したいと考えています。

また、当院へ通院希望される維持透析患者様には、最適、最良、最新を兼ね備えた良質な透析処方を提供したいと考えており、日々スタッフ全員で研鑽に努めています。

『透析施設紹介』
はなのきクリニック

医療法人はなのきクリニック
院長　馬場　芳

当院のある豊橋市には東三河最大級の梅林園である梅林公園があります。多種類の梅が整備され２月上旬～３月上旬ごろに梅の花の春まつりを開催しており市民の憩いの場となっています。交差点をこえると大池公園というその名の通り池とその周りの美しい森林を散歩して楽しめる公園があります。池の周りにいろいろな種類のつつじや桜が植えられ市内随一のつつじの名所となっています。つつじは豊橋市の市の花でもあり咲き誇る４月中旬から５月上旬にかけて、つつじまつりが開催されます。また公園内にはアラカシ、カイヅカイブキ、クスノキ、ヤマモモなどが植えられ多種の野鳥も観察できます。花の季節でなくてもゆっくりと散策でき、高齢者や若者など訪れる人が絶えません。

そんな自然豊かな公園のすぐ南に県立豊橋東高校があります。ＮＨＫ連続テレビ小説「エール」で古関裕而の妻金子の母校として有名になった由緒ある学校です。もともとこの地域は地盤も強く高台にあり震災には強いところといわれ、当院を含め多くの病院・クリニックや学校などの公共施設があります。

当院の近隣には皮膚科、歯科、耳鼻科、乳腺外科、整形外科、脳神経外科があり、当院の透析患者さんたちは本当に助けられています。また市内には公立病院のほか、豊橋ハートセンターや光生会病院、成田記念病院、青山病院、権田脳神経外科、ひがし循環器クリニックなど入院して透析治療のできる長期療養型の病院も増えてきました。

当院は平成29年にこの地域に新築移転した平屋のクリニックです。最近の傾向として高齢者の患者さんが多くまた増加していますので、安全性を確保するために地震の揺れに対して安定性が高くまた震災などから早く逃げられるよう平屋に設計しました。

理念・施設の方針

内科・小児科・在宅医療・透析など、慢性的な疾患を抱えられた患者さんの治療に力を入れ、身体や心の健康をサポートし皆様が通いやすく、優しく温かなクリニックを目指し、スタッフ一同精進しています。

シャント管理について

院内の手術室にてシャント手術からＰＴＡまでバスキュラーアクセス全般の管理を当院で行っています。問題がありそうな時はもちろんですが、定期的に透析患者さんのシャントの状態を検査して観察し、閉塞や狭窄を早期発見し治療しています。

最近は成田記念病院と連携し腹膜透析の管理も行っています。

足の合併症予防には、毎月フットチェック・ケアを行い、トラブルゼロを目指しています。異常があればすぐに豊橋ハートセンターなど専門の病院に治療を依頼しています。

送迎サービスについて

送迎専属スタッフがおり、車いす対応の送迎を行っています。

食事について

食事の提供を行っています。栄養士が献立した食事を清潔な院内キッチンにて調理師が心を込めて作った出来立てをお召し上がりいただけます。

毎日サンヨネさん（大正10年、海産物問屋から始まった地元で有名なスーパー）から新鮮な素材を購入し、冷凍物は一切使わず、出汁からしっかり取って塩分を減らし（１食２ｇ以下）作っています。栄養バランスを考慮した食事メニューを提供しています。患者さんやスタッフ、外勤の医師たちも皆さんとてもおいしいと言って下さいます。

透析について

透析室は患者さんが快適に過ごせるよう工夫をしています。まぶしくないような間接照明、風が直接あたらないよう体に優しい空調設備、テレビ視聴は無料でWi-Fiも完備しています

オンラインＨＤＦ透析を行っています。画一的な治療とならないよう通常のオンラインＨＤＦだけでなく患者さんに応じてi-HDF透析を行っています。DCS-200Siを使用し、血液量モニターBVplusを搭載し安全に適した透析ができるよう努めています。

また当院は無酢酸透析液、カーボスター透析剤を用いています。

酢酸を使わないことで、以下のメリットが期待できます。

- 透析中や透析後の血圧が安定しやすい
- 透析後の疲れが出にくい
- 栄養状態に良い
- ＱＯＬ向上に良い

マットレスについて

当院ではゆっくり寛いで頂けるようパラマウントのエバフィットなど腰痛対策のマットレスを使用しています。

超音波検査については心エコー、腹部エコー、頸動脈エコーを行い病気の早期発見に努めており、必要なかたには基幹病院でＣＴ検査を依頼しています。

当院では患者さんそれぞれにあう透析治療を施行し心の通った治療を目標にしています。患者さんがお元気に安心して過ごしていただけるようスタッフ一同より一層努力してまいりますのでよろしくお願いいたします。

◆ トピックス ◆

看護師、訪問看護師のための腹膜透析（ＰＤ）セミナー

看護師、訪問看護師のための腹膜透析（ＰＤ）セミナーを７月21日（日）にウインクあいち会議室で開催しました。

小児ＣＫＤ（慢性腎臓病）対策講習会

小児ＣＫＤ（慢性腎臓病）対策講習会を８月１日（木）にウインクあいち会議室で開催しました。

「よく知って、よく考えよう！ 臓器移植のこと」

「よく知って、よく考えよう！ 臓器移植のこと」のパネル展示を９月13日（金）から10月９日（水）に愛知県図書館の１階エントランス Yotteko（ヨッテコ）で行いました。

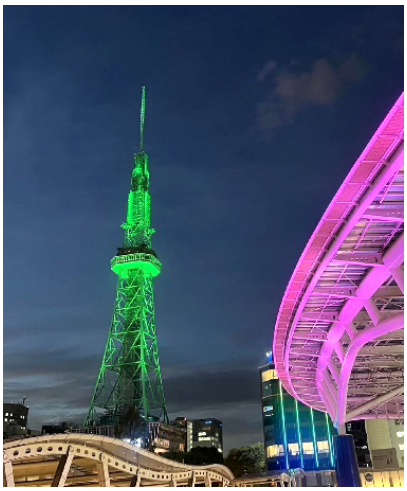
グリーンリボンウォーク

腎臓移植を受け、現在社会復帰して通常生活を営んでいる移植者の方々の体力向上と相互の親睦を図るとともに、一般の方々には臓器移植についての理解と協力を深めていただくことを目的として10月27日（日）に名古屋城周辺でグリーンリボンウォークを開催しました。

グリーンライトアップ

グリーンライトアップとは、グリーンリボンキャンペーンの一環として、移植医療のシンボルカラーであるグリーンにライトアップすることを通じて、臓器移植医療への理解が広がることを期待する取組です。

今年度は、10月の「臓器移植普及推進月間」に合わせて、県内の著名なランドマークである名古屋市の「中部電力 MIRAI TOWER」と常滑市の「見守り猫『とこにゃん』」の２か所をグリーンライトアップしました。



中部電力 MIRAI TOWER
10月11日～16日

見守り猫「とこにゃん」
10月11日～20日

編集後記

今、厚生労働省は日本臓器移植ネットワーク（ＪＯＴ）を改革しようとしています。まだ明確な方向性が定まっていませんが、愛知腎臓財団の活動にも大きな影響があります。皆様には今後この動きを注視するようお願い致します。

厚生労働大臣感謝状の愛知県施設への贈呈がしばらく途絶えていましたが、今年はあいち小児保健医療総合センターが受賞となりました。小児患者からの臓器提供は、２０１０年の臓器移植法の改正後も全国であまり増加しませんでしたが、小児医療センターでは他施設で臓器不全に苦しむ子ども達のために「命のバトンをつなぐ」という言葉を院内に周知し、小児の臓器提供に繋げられたことを加藤美穂子先生の寄稿で知りました。これからも、子ども達のための医療を推進される事を期待しています。個人では、ＪＣＨＯ中京病院泌尿器科部長の小松智徳先生が受賞されました。先生には自院の移植のみならず、ＪＯＴのメディカルコンサルタントとして、忙しい中も近隣の臓器提供病院に出かけ腹部臓器の評価をされたことを愛知腎臓財団としても大変感謝しています。

愛知県薬剤師会が主体となった「ＣＫＤシール」発行は、これまで病院やクリニックの医師が中心であったＣＫＤ予防活動が、薬局でも患者さんに情報提供がなされることで更に活発化すると期待します。移植施設紹介は、今回は愛知医大移植外科で、小林孝彰教授には、今注目される異種移植の意味や、ＤＰＣによる臓器提供の施設評価についてもご紹介いただきました。次年度日本移植学会の会長としての活躍も期待しています。

トピックスとして、毎年行われるグリーンライトアップキャンペーンやグリーンリボンウォーク以外に、愛知県図書館でのパネル展示「よく知って、よく考えよう！ 臓器移植のこと」、看護師、訪問看護師のための腹膜透析セミナー、小児ＣＫＤ対策講習会が開催されたことについてもお知らせ致します。

（Ｔ・Ｋ）